

交流文化

立教大学観光学部編集

創刊号 01

シーサンパンナ
特集 **西双版纳** (中国・雲南省) で
交流文化 を考える

少数民族が多く暮らす辺境地域は、観光によってどう変わったのか



交流文化

01

創刊号



特集… 西双版纳で交流文化を考える

立教大学観光学部



- 06 なぜ西双版纳は「交流文化」を考えるのにふさわしいのか
- 08 観光とともに変わる西双版纳 杜国慶
- 14 景洪の市場にて 白坂蕃
- 20 山中の歓楽郷、モンラー 稲垣勉

04 **特集** シーサンパンナ
西双版纳で
交流文化を考える

02 巻頭言 『交流文化』を創刊する

28

「交流文化」フィールドノート 01
新宿区神楽坂の観光調査
稲垣・杜ゼミナール



34 私のカンニバル・ツアーズ
豊田由貴夫

38 読書案内

「雲南フィールドノート」
「雲南の豚と人々」

最近の講演会から

「観光学」はどのように発達してきたのか
ピーター・マーフィー博士

40 在外研究通信 01

「異文化」は街角にある 大橋健一

2006年4月、
立教大学観光学部に
新学科
「交流文化学科」(仮)誕生。

国や地域間を問わず、観光による移動は人々の意識を変え、文化を容容させていきます。

新設を予定している「交流文化学科」は、近年観光の役割として注目されている「交流」に焦点を合わせ、地域研究とともに、多文化共生への視点を養い、グローバル化する世界で交流の実をあげる国際公務員、ジャーナリストなど国際的人材の育成を目指します。



立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

2005年度 立教大学観光研究所 公開講座

立教大学観光研究所では、以下の公開講座を実施しています。

●旅行業講座

(2005年5月開講7月修了)

旅行業に必要な専門的、かつ実践的な知識を一流の講師陣が、実務経験のない人にもわかりやすく講義します。毎年秋に行われる一般旅行業務取扱主任者試験(国家試験)に向けて、法律から海外・国内観光資源、旅行実務など幅広い内容を扱います。

●ホスピタリティ・マネジメント講座

(2005年9月末開講12月修了)

ホテル・旅館業・外食産業を中心とするサービス産業は、今日「ホスピタリティ産業」と呼ばれています。その基本理念から、人事、経営、マーケティング、法律などの実践的な理論まで、業界の著名な方々が講義します。

詳しくは、立教大学観光研究所事務局(池袋キャンパスミツチエル館)へ。
TEL 03-3985-2577 FAX 03-3985-0279
Email: kanken@tr.rikkyo.ac.jp <http://www.rikkyo.ne.jp/grp/kanken/>

観光は社会を変え、文化状況に大きな影響を与える。

たとえばバリやハワイなど観光に大きく依存する地域では、観光化が音楽・舞踊や民族衣装、さらには慣習家屋など文化の表現形態を変えたことはよく知られている。さらに人々が観光化に伴う文化変容をどのように意味づけ、語るのかという学術的報告も数多い。もちろん観光が伝統文化の破壊者として機能するのか、はたまた観光を組み込んだ新しい文化を生み出す触媒として機能するのかについては、論者の立場に大きく依存している。しかし、いずれにせよこれらの地域では、観光を前提に新しい文化状況が生じていることは事実であり、こうした文化を一般に「観光文化」と呼んでいる。

伝統文化の所有者としての地域住民や先住民、その消費者としての観光客という二項図式は、観光文化を考える基本構造とみなされてきた。しかし現実はいくらも単純ではない。

われわれが中国雲南省の世界遺産都市・麗江で継続実施している調査によれば、ユネスコ指定の保存地域内で土産物などを商う事業者の大半は他地域から入り込んだ移住者である。元々の住民・納西(ナシ)族は他地域からの移住者に自宅を賃貸し、自らはより生活条件の良い新市街に家屋を求めて域内移住する。保存地区・麗江古城の様相は一変し、同時に新市街では納西族による新たな文化の継承運動が始まる。観光化のプロセスの中で、納西族は保存地区内の所有不動産を貸すことで有産階級化し、保存地区

とその周辺では階層分化が進み、社会構造さえ変化する。

観光化の影響は従来「観光文化」と言われていた状況より、はるかに広範囲で複雑である。われわれは、観光化とそれにもなうひとびとの移動によって生じるダイナミックな社会状況、文化状況を「交流文化」と規定して研究対象としてきた。

*

ところで立教大学では第二次大戦直後に始まった課外授業・ホテル観光講座を皮切りに、観光の国民経済、地域経済への貢献、国際親善への寄与に着目して教育・研究を進め、多くの人材を観光産業に送り出してきた。課外講座は発展し、現在では観光学部、博士課程までを擁する観光学研究科に発展している。しかし観光が急速に拡大し、正負双方の影響が複雑化するにつれ、従来の観光産業に対する人材供給だけでは社会的要請に答えられなくなりつつある。観光教育の「もう一つの柱」として、観光が生み出す文化状況に対して地域を立脚点に正確に把握し、記述し伝え、発言出来る人材を育成することが求められている。

こうした人材があつてこそ、観光は交流の実をあげ、社会の要請に応えることが出来る。観光学部では二〇〇六年四月から、従来の観光学科に加え、交流文化学科(仮称)を設置して、社会の新しい観光教育のニーズに添えていくことになった。これを機に、観光学部では『交流文化』を創刊して、従来からの研究成果をひろく社会に問うことにしたい。

特集

シーサンパンナ

西双版纳で 交流文化を 考える



Xishuangbanna

中国雲南省南西部に位置する

西双版纳傣族自治州は、ラオス、ミャンマーと国境を接する民族豊かな場所として知られている。

州人口の3分の1を占める傣(タイ)族をはじめ、

13の少数民族が居住するこの地域は、

熱帯雨林に生息する多様な動植物に恵まれ、

エキゾチックな民族の文化を体験できる

「中国の中の外国」として、1980年代初めには

観光開発が進み、多くの観光客が訪れるようになった。

移動するのは観光客ばかりではない。

観光導入にともなう経済活動の活発化につれ、

中国国内からも多くの出稼ぎ、移住者を受け入れ、

地域の生活文化は大きく変わろうとしている。

観光がもたらす「交流文化」の現在を見ていきたい。



なぜ西双版纳は「交流文化」を 考えるのにふさわしいのか

「交流文化」創刊号の特集は西双版纳である。巻頭言で述べたような交流文化が現に生じ、社会・文化状況が大きく変化しつつある地域は数多く存在している。中国・雲南省西双版纳傣族自治州はその典型である。

西双版纳に限らず雲南省全体がいわゆる辺境であり、省都・昆明から北京までの距離は、北京・東京間より遠い。しかし国家的視点では、中心と周縁という構図で周縁に位置づけられながらも、西双版纳では隣接するミャンマー、タイ、ラオスなどの諸国と日常的に交渉・交流が行われ、国境を越える文化圏が形成され、首都を中心とする国際関係とは大きく異なる域際関係が成立してきた。また内部的には平地民である傣(タイ)族と、山地民との交渉が見られ、全体としてきわめて重層的な社会が形成されている。

一方で西双版纳は周縁という性格から、中国における「内なる他者」として、遠隔地という地理的条件にもかかわらず早くから観光化の対象となってきた。観光化は重層的な社会・文化状況をまことと変容させていく。

ことに西双版纳の観光は、映画などのメディアを通じて地域文化の一部を強調するかたちで、特定

のエキゾティックな表現を与えられてきた。

熱帯樹が繁茂し、孔雀が舞うロマンティックな場所としてイメージされ、優美な傣族女性の表象が繰り返し観光宣伝に利用されていく。さらには傣族の性的放縦さといった言説さえも人口に膾炙するようになる。観光の受け皿施設もこれを反映してつくられていく。いわく「民族風情園」、「傣族園」、「哈尼族姑娘寨」……。一方で地域も観光によって与えられたイメージと交渉しながら、自らを変化させていく。

現在、定期市には、お揃いの衣装を着た若い傣族女性があふれている。衣装は優美で女性的であることが強調されており、観光が彼らに与えた価値ときわめて適合的である。しかしこれらは伝統的な民族衣装とは大きく異なる創られた新しい伝統であり、まさに観光が生んだ「交流文化」の一形態といえよう。

現在、中国社会では海外旅行が徐々に一般化し、かつて中国国民が「内なる他者」を求めた西双版纳観光は緩やかな衰退過程にある。しかし観光化が西双版纳に与えた社会・文化的影響は大きく、「交流文化」を考えるのにふさわしい事例と言える。





色鮮やかな刺繍と眩しい金属の装身具に飾られたハニ族の女性たち。彼女たちは観光客の求めに応じて民族舞踊を披露し、土産品として民族クラフトを販売する。右の女性が手にしているのは土産品のテキスタイル

観光とともに 変わる西双版纳

杜国慶（観光学部）

中国でも早い時期から観光開発が進んだ西双版纳。観光化は経済効果をもたらしたと同時に、地域の人々の生活を大きく変容させている。

の栽培も盛んで、お茶の原産地として知られる。いま日本で流行っている普洱（プーアル）茶も、ここの名産物である。

北にはヒマラヤ山脈があるため、地形は瀾滄江を中心に南に口が開く高原盆地となり、台風には影響されない独特の熱帯季節風気候が形成される。年平均気温が18〜20℃で冬がなく、年に乾季と雨季に分かれる。

1980年代に始まった観光開発

西双版纳は早くも1982年に国家風景名勝区に指定された。州内には、傣族（タイ族）やハニ族などの高床式住居に民族色豊かな生活用具を展示した「民族風情園」、傣族仏教建築の特徴をしめす「景真八角亭」や「曼飛竜塔」など、観光名所が多い。また傣族の正月には水かけ祭や競漕が行われる。第1図で示すように、海外観光客の变化は、1996年までは急増し、以降は安定する傾向を示す。国内観光客の増加は、1999年まで続いた。観光客入込み延べ人数は2002年に州人口のおよそ3倍に

「動植物の王国」

西双版纳（シーサンパンナ）は、中華人民共和国雲南省南西部の瀾滄江（メコン川）流域、北緯約21度10′、東経99度55′10.1度50′に位置するタイ族自治州である。南東部でラオス、ミャンマーと国境を接する。966.3kmの国境線は、雲南省の国境の4分の1を占める。タイとヴェトナムとは、直線距離で僅か200余kmである。景洪（シンホン）市、勐海（ンハイ）県、勐臘（モンラー）県からなり、州

政府は景洪市におかれている。面積は1.9万km²。人口は86万人（2003年）。

国土面積の50.4分の1しかない州内には、中国の6分の1の植物、4分の1の陸地脊椎動物、3分の1の鳥類が生息している。「動植物の王国」と呼ばれ、1986年に国の自然保護区と指定された。密林には紫檀（したん）、クスノキなど経済価値の高い樹種が多い。温暖な気候に恵まれているため、水稻の二期作、三期作が可能である。ゴム、コーヒー、バナナ、サトウキビなどの亜熱帯作物



西双版纳を流れる瀾滄江（メコン川）



公園には傣族の風習である水かけ祭りを体験できるコーナーがある
西双版纳には傣族が多く暮らす。彼らは仏教を信仰し、村には必ず寺院がある

相当する250万人に達した。現在、州内には宿泊施設が140余軒あり（うち、星付きは43軒）、客室数は9193部屋。ミャンマー、ラオスまでの国際観光ルートも開通され、中国でも数少ない国境観光、国際観光地として

脚光を浴びている。1980年代以降、東南アジアに通じる門戸として注目され、景洪空港の拡張、景洪港の建設が進んでいる。現在、バンコクとラオスまでの国際線が運航されているほか、タイ、

ラオス、ミャンマーなどの周辺国家と結ぶ道路や鉄道の建設も計画されている。観光関連産業は、西双版纳に大きな経済効果をもたらし、観光産業の直接従業員は1・2万人、間接従業員が6万人である。2002年の観光総合収入は15・91万元となり、観光産業は州の主要産業となっている。今後はメコン川を通して、東南アジアとの国際交流と国際観光開発も注目される。

熱帯雨林と焼畑

西双版纳の自然の魅力のひとつは熱帯雨林である。世界の熱帯雨林面積は陸地の6%に過ぎないが、地球の生物の74〜86%が生息し、中にはまだ学名が付けられていない昆虫や植物の種も多く生息していると推定されている。世界の熱帯雨林の大半は赤道から南北に緯度10度以内で分布するが、北回帰線にある西双版纳の熱帯雨林は、世界でも珍しく唯一のものであると言えよう。

西双版纳の約2700km²の国家自然保護区域には、460km²の原始林が残されている。熱帯雨林の「雨」とは降雨量の多さを指すだけでなく、林内が湿潤であるため、昼間に蒸発した蒸気が朝晩になると葉に積って水

滴となり再び地面に落ちるため、林内は常に雨が降っているような状態になることも意味する。日本人の生活が海と密接な関わりをもつように、西双版纳の各民族の生活も熱帯雨林を頼っている。

たとえば、熱帯雨林には「箭毒木」と呼ばれる桑科の常緑木がある。樹液が猛毒をもつため、矢先に塗って狩猟に使われてきたが、その木の樹皮はかなりの厚さを持ち、加工すると非常に柔らかくなる。現地の人々は、それを敷き布団や裁縫の材料に使う。

熱帯雨林で生息する多様な動植物は、人類に新しい医薬品や食物を供給する可能性をもつ巨大な遺伝子の宝庫であるとも言われている。これまで発見された医薬物質には、避妊ピルを合成するために欠かせないジオステロン、循環器障害の治療に使用されるレセルピン、心臓や肺の外科手術で麻酔薬として使われるクラレシなどがある。それでも熱帯雨林の植物のほんの一部しか調査されていない。人類にとって、熱帯雨林はまだまだ神秘の存在であると言っよいであろう。

熱帯雨林に影響を与える自然現象や人間の活動は数多くある。落雷による火災、地すべりなど自然による影響は、人間による過剰な

西双版纳の観光開発小史

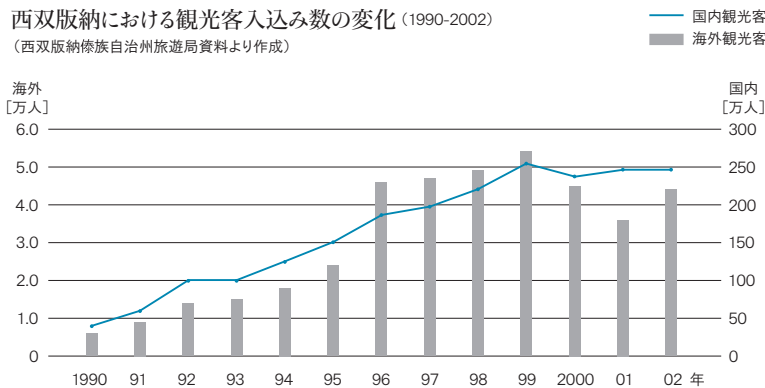
1953年	中華人民共和国の自治区になる
1982年	国家風景名勝区に指定。以後、国内観光客が増える
1986年	国家自然保護区に指定される
1990年	景洪空港の開設
1991年	海外観光客数1万人を突破以後、96年頃まで急増
1993年	ユネスコ生物圏保護区ネットワークのメンバーとなる
1995年	中国初の自然生態州に指定される
1998年	国家優秀旅遊都市に選ばれる
1999年	国内観光客250万人、海外観光客5万人に。以後、国内海外ともに安定傾向に



民族文化を説明する傣族のガイド

西双版纳における観光客入込み数の変化（1990-2002）

（西双版纳傣族自治州旅遊局資料より作成）



伐採と開拓などの影響に比べれば、遙かに小さいといえる。伝統的に行われた焼畑農法は、ごく小さな区域の森林を焼き払うだけであったものの、人口規模が増大した今日には、その環境への悪影響も懸念されている。焼畑は、山林や原野の草木を焼き払い、手早く耕地を作り、雑穀やイモ類などを栽培する伝統的な農法である。収量が低下し、雑草が増えると、数年ごとに移動しながら作物生産を行う。新しい土地を求めて居住地を変えていく様子はさながら「遊牧民族」ならぬ、まさに「遊耕民族」とも呼びうるものである。

西双版纳のハニ族も、この農法を行っていた。熱帯雨林では、焼畑のために林地を切り開くと、激しい風化作用をうけ、たちまち土壌が浸食されてしまったため、数年ごとに他の地点へ移動しなくてはならない。焼畑農耕民は部族社会を形成し、自給自足的な経済生活を営むことが多いことも特徴のひとつである。

13の少数民族が居住

西双版纳には、州人口の3分の1を占める傣族をはじめ、ハニ族、ラフ族、プーラン族、ジノ族など13の民族が居住している。ひとつの地域で豊かな民俗風情を体験することが、



月曜市場。週一回の市場には、様々な民族が遠くから集まる

西双版纳観光の魅力のひとつとされている。観光客にとって民族を判別する際の特徴のひとつは、服装である。主に平野部で居住する傣族は、長い筒状のスカートと短い上着が特徴である。山間部で生活するハニ族は、逆に歩きやすいためスカートを短くし、日照から皮膚を守るため長袖の上着を着る。傣族、ハニ族の祭のとき、多くの綺麗に着飾った女性たちに出会うだろう。しかし、皮肉なことにはいまやその衣装の多くは市場で売られている既製品である。眩しく見える銀色の飾りもそのアルミ鍋の打ち直しがほとんどである。

観光化は観光関連業の人々も誘致する

2003年8月に、西双版纳で調査していたとき、いかに観光化が地域の生活文化を変えつつあるかを実感した。

ある日の夕方、夕食に出かけようと思っただけで、運転手からある村に行くことを薦められた。その村は市内からそれほど離れていない郊外にあった。一軒一軒の傣族の家屋が並ぶ集落のように見えたが、実はそれは家屋ではなく、家族単位で経営しているレストランだった。話を聞くと、農業だけでは生計が難しいの



上・地元には生息しないラクダも観光化にともない出現 下・観光地で織物を実演している傣族の女性



で、政府の方針に従い、村民が家族単位で空き地を使ってレストラン街を建設したという。私たちが食事したレストランの主人は、遠く江西省から来たという。最初は西双版纳でタクシー運転手をやっていたが、乗客の傣族の若い娘と知り合って、結婚に至った。主人は標準語ができるので、客引きと料理の説明を担当し、姑と奥さんが台所で一生懸命傣族の料理を作ってくれたのだ。

そして、西双版纳の「民族風情園」でも、河南省からやって来て、売店を営んでいる50代の夫婦と出会った。もともとはミャンマーで洋服の販売をやっていたが、競争が激しくなったので、中国に戻り西双版纳で売店を営むことにしたという。

こうして観光化は、国内外の観光客だけではなく、観光関連業の人々も誘致し、地域としてそこに暮らす人々の生活パターンを大きく変えている。中国では、これまで戸籍制度が人口の移動を厳しく制限していたが、近年、経済発展とともに、その規制が大きく緩和された。結果として、人口の移動が容易になり、文化の交流も盛んになったものの、地域文化はその特色を失いつつあると見られるようになっていく。



市場に来ている傣族の女性



茶米の強飯を売る傣族の女性。自宅で蒸かして、蒸し器のまま持つてくる。

景洪の 市場にて

白坂蕃（観光学部）

その国その地域の文化が凝縮しているのが市場だ。西双版纳の州都、景洪の自由市場から見えてくる人々の暮らしと文化とは。

なぜ「市場」を訪れるのか

「観光という外部からのインパクトにより、農山村がどのように変容するのか」というのが私の本業（地理学）で、また「地域研究（area studies）」としてのマレーシア、アジアの熱帯の hill stations（高原避暑地）、焼畑（主として中国の雲南）、羊の移牧（アルプスやトランシルバニア）も、私の重要な研究テーマである。調査の旅に出ると、

自分の本業以外にも、興味を引かれるものがある。それが筆者にとっては、「市場」である。

外国に行くと、それぞれの国に独特の「匂い」があると思う。日本に来た外国人には、それは醤油の香りであるという。マレーシアに住んでいたとき、それはココナッツミルクの香りであると私は思った。

私は、どこの国、どこの街を訪れても、できる限り時間をみつ

けては市場にゆく。市場は、その国その地域独特の顔であり、人びとの堂々とした生活と伝統が感じられる場所である。ここでは、雲南省西双版纳傣族自治州の州都、景洪の自由市場（農貿市場）をとりあげ、西双版纳の人びとと文化の一面を伝えたい（なお、数値は1989年ころのものである）。

自由市場の発展

中国では、街の中で日本で見かけるような八百屋さんとか魚屋さんにはお目にかからない。野菜、魚、肉などの生鮮食料品は、ほとんどが自由市場で売られている。生産者が生産物を持ち込んでも、直接消費者に販売できる自由市場は、都市生活者にとっても、生産者にとっても重要な機能をもっている。

1949年の新中国建国当時、中国には多くの自由市場があったが、文化大革命の時期に、自由市場は「資本主義のしっぽ」と批判をうけ減少した（片山敬治 2005）。しかしながら、国営の流通機構では掌握し切れない物資（とくに農産物）を供給する場所として、自由市場に積極的な地位を与えたのは、11期3中全会（1978年12月）で、それ以降、中国では自由市場が急速に成長した。

景洪の「農貿市場」

フェニックスの並木の美しい景洪は人口約3万人で、その多くは漢族以外の少数民族である。西双版纳は傣（タイ）族が多いので

西双版纳傣族自治州となっているが、13もの少数民族が住んでいる。市街地の北部に大きな自由市場がある。この市場は、面積が1ヘクタールもあり、それまで市内の6カ所にあった小さな市場を整理して、1985年4月にオープンした。私は、研究の合間に、この市場の店舗のすべてを調べた（詳しくは白坂蕃 1993）。この市場には、全部で340もの小売業者が営業していた。このうちもともと店舗数の多いのは、衣類なども含めた日曜雑貨を扱う店（44%）である。残りの56%が、肉類（76店）、蔬菜（約60店）、果物（15店）、豆腐（6店）、水産物（6店）、土産物（27店）である。小売り店を民族別みると、傣族をはじめとする少数民族が70%、漢族は30%である。

営業はもちろん許可制である。生鮮食料品は、価格の上限が決められており、これを越えたり、重量が足りないと罰金をとられる。市場の使用料は売り上げの2%で、毎日、管理局におさめる。市場の管理人は5人で、常時市場の入り口近くにある事務所にいるので、市場の使用料を払わない不届き者はいない。しかし、少数民族にはこの使用料が免除され、漢族のみが収めている。少数民族に対する優遇は、産児制限にまでおよび、有名な「一人っ子政策」は漢族のみに適用され、多くの少数民族は制限がない。

この市場の利用者は1日に2〜2.5万人で、景洪の人口が3万人であるから、相当に広い範囲から利用客が集まってくると思われる。私の「景洪県工商行政管理局」での聞き取りによれば、売り上げの第1位は肉類で、市場の総売上の25〜30%を占める。肉類の店舗の中には、回族、つまりイスラム教徒のために、イスラムの掟に則って屠殺された牛肉を売る店もある。こんなところ

にまで浸透しているイスラム教に驚かされる。肉類は、農家が副業として育てた家畜を屠殺してもってくる。これは、国营農場から卸されるものより新鮮で、消費者に評判がよい。第2位は蔬菜(25%)で、やはり、生鮮食品が市場の主要な販売品目である。

コメの色からみえること

この市場には、日本の鮭の原形といわれるナレズシ(日本では琵琶湖のフナズシが有名)も売っているが、ここでは色とりどりの米について述べる。

西双版纳を訪れると、人びとの食べているコメの色がさまざまなの驚かされる。黒米、紫米、紅米、赤米、さらにそれらの中間の色などじつに多様である。これらは日本ではほとんどみられないが、赤米などは、日本の赤飯と外観がそっくりであるが、こちらの方が味がよい。

日本の赤飯は、もともとコメ自体に色がついていた。色のついた米は比較的低温に適応し、味は良いが、白米にくらべると単位面積当たりの収量が15〜20%も少ない。したがって、徳川幕府は、赤いコメが混じっていると年貢米として認めなかったため、急速に赤米は駆逐された。そのため、お祝のときには小豆をいれてコメに色を付けなければならなくなった。しかし、対馬や種子島では神社の神田で赤米が栽培されているのを、私は観察したことがある。日本の稲作は、中国から伝播してきたが、この時のコメは赤米であったと考える研究者もいる。

景洪の市場では、色とりどりの強飯が売られているが、紫色の

強飯がもつとも人気がある。バナナの葉に包んで両手にいっぱいの量で0・5元(邦貨25円)くらいである。米粒は長く、とてもネバネバしており、モチ種である。これを素手で握り、棒状にして食べる。独特の香りがあり、とてもおいしい。食べながら、イネの伝播経路に思いを馳せるのが常であった。

景洪の市場で考えたこと

市場には、その国その地域の文化が凝縮している。景洪の市場を歩きながら、私は次のようなことを考えていた。

人間は、古来からさまざまな旅の中で、自らの風土とは異なる文化に接し、刺激を受けたり、知識を吸収したりして、自らの生活の糧としてきた。それは、観光ということもできるし、大きくとらえれば文化の交流である。要するに、異文化と接触し、異文化を体験し、異文化を理解し、異文化を摂取するということがある。旅は、大なり小なり、そうしたことを無意識のうちに実践するものである。そして異文化をうんぬんするときに、とても大切なことは、いわゆる ethnocentrism (自民族中心主義) に陥らないことである。

参考文献

片山敬治 1995 「天津市における自由市場と野菜流通」『愛大史学』(愛知大学文学部史学科) pp. 95〜118
白坂蕃 1993 「景洪の市場と蔬菜」吉野正敏編『雲南フィールドノート』古今書院 pp. 54〜91



左上・街にきた傣族の娘たち 右上・市場の景観/24時間開いているが、午前中がもつともにぎわう 中・景洪の町並み/多くの人びとが自転車を利用する。人びとは片道10km程度なら徒歩や自転車で行き来する 左下・景洪農貿市場の入り口/西双版纳のシンボルである象が見守っている 中下・回族(イスラム教徒)向けの肉屋/「清真」とはイスラムを意味する 右下・価格の上限を告知する看板



西双版纳の
国境の
向こう側

山中の 歡樂郷 モンラー

稲垣勉 (観光学部)

西双版纳に接するミャンマー国境の町モンラーは、
享樂的な歡樂郷の様相を呈している。
中国周辺で次々に生まれている
国境観光の背景には何があるのか。



上・中国では「人妖」と呼ばれるタイのニューハーフショー(上)。
下・モンラーのカジノの基本はトランプだが、一部では雲南伝統のさいころ賭博も開催されている(下)



モンラーという土地

国家の周縁部では時としてきわめて特徴的な観光形態が生じる。本稿で報告するモンラーは、そうした観光開発の一典型と言えよう。

モンラー（勐拉）は中国の西双版纳傣族自治州と接する、ミャンマー・東シャン州の国境の町である。行政的には東シャン州第四特別区として、ワ州統一軍（United Wa State Army-UWSA）およびそれと緊密な関係にある東シャン州軍（East Shan States Army-ESSA）が実効支配しており、これらの旧反政府勢力とヤンゴン政府が停戦したことによって成立した自治区である。

モンラーを含む東シャン州第四特別区の民族構成は、隣接する西双版纳とほぼ同一と考えて良い。谷あいの平地は西双版纳で水傣と呼ばれるタイ・ルー族に属しており、山地はアカ族（中国名ハニ族）、ラフ族、ワ族など様々な少数民族が点在している。ワ族の自治区とはいえ、ワ族の人口比は高くない。東シャン州で「ワ」という言葉はきわめて多義的に用いられている。エスニックグループとしてのワ族を指す場合もあるが、それ以上に政治勢力としてのワ州統一軍およびその政治母体であ

るワ州統一党を指すことが多い。ワ州統一党はワ族の民族運動というより、むしろワ族、中国系、シャン族、アカ族などが連合した地方政治勢力としての性格が強い。

こうした事情から第四特別区は、基本的にタイ・ルーの土地と考えてよい。同時にタイ・ルーはタイ・クンなど他のタイ系諸部族とともにシャン族という上位概念に包摂される。また広く見ればかつてのランナ王国の一部として、北タイ、西双版纳、北ラオスなどとともに巨大なタイ文化圏の一部を構成している。

ケシ栽培から観光へ

モンラーの観光化の歴史は著しく短い。東シャン州の中国国境周辺が、第二次大戦後から長く続いた内戦から安定化に向かったのは1990年代初頭である¹¹⁾。この過程で前述の自治区が成立し、その後観光化の歴史が始まる。モンラーにおける観光はわずか10年程の歴史しか持っていない。

東シャン州は「黄金の三角地帯」と呼ばれる阿片生産の一大中心地であった。90年代初頭まで、モンラーでも大規模なケシ栽培が行われていた。しかし一旦停戦が実現すると、

右・ 野味料理のひとつ野生のコブラ。これ1匹で400元程 中・ 右手がモンラーのカジノのひとつ、左手はディスコ 左・ 東シャン州軍司令官ウー・サイリンによって建設された麻薬撲滅博物館。阿片の害と、いかに阿片を撲滅したかについて力説する



外資導入で経済発展を目指すヤンゴン政府にとって、対外関係の改善上、擬似的に主権が及ぶようになった地域でのケシ栽培は表面上消し去るべきものであり、一方他に頼るべき産業も持たない地域にとって、ケシ栽培の禁止はそれに代わるべき産業を必要とする。ケシ栽培の代替産業として導入されたのが観光であった。

衰退する一次産業を代替するために観光が導入される例は少なくない。ハワイの観光は当初サトウキビやバナナプルなどプランテーション農業からの脱却を大きな目的として展開されてきた。また現在でも、サトウキビ・プランテーションの行き詰まりを、観光の導入によって克服しようと言う政策は、キューバをはじめとして中米・カリブ海諸国を中心に散見される。この産業代替プロセスを、ハワイのイーストウエストセンターはその報告書の中で「New Kind of Sugar」⁽²⁾と表現している。確かにサトウキビ・プランテーションも観光も、ともに外部からもたらされる開発であり、低廉な労賃を前提として成立する。地域の観光への特化は、期待に反して経済を次の発展段階に押し上げることがまれであり、むしろ外的環境の変化に対して脆弱な経済構

造をつくっていく。これも単一作物に依存するプランテーション経済との類似点であろう。まさにハワイにとってのサトウキビ・プランテーションが、モンラーにとってはケシ栽培だったということになる。

かつて東南アジア山地部では広範にケシが栽培されてきた。しかしケシ栽培は現在きわめて強い規制下に置かれており、同時進行する焼き畑禁止とともに、地域にさまざまな影響を与えている。大陸部東南アジアにおけるケシ栽培の廃絶、焼き畑禁止と観光との関連は、大きく二つのパターンに区分できよう。第一はケシ栽培が制度的、組織化されて行われてきた場合である。地域経済を維持するために、組織的な産業の切り替えが不可欠である。しかし単位収益の高いケシ栽培を、ソバや西瓜などの代替作物で置き換えることは地域経済の維持から不可能であり、収益性の高い観光が組織的に導入される必然性が生じる。モンラーはこの典型といえよう。

他方、ケシ栽培が散発的に行われてきた地域では、ケシ栽培の廃絶・焼き畑禁止にもなつて、それに依存してきた山地民が生活に行き詰まり、山を下りる例がしばしば見られる。都市部への流入も一つの方向であるが、

新興の観光地に流入し、観光に依存して生活し始めることもきわめて一般的な方向性である。ラオスの古都ルアンパバンはユネスコの世界遺産に登録されて以来、急速に発展した観光地であるが、観光スポットの一つモン市場でクラフト類を商うモン族 (Hmong) の多くは、こうして移住してきた人々である。移住者として耕すべき肥沃な土地を持たない彼らにとって、観光への依存は必然といえよう。

享楽的国境観光

さてモンラーにおける観光化について、より詳しく見ていくことにしよう。

東シャン州でケシ栽培が始まったのは、19世紀にさかのぼるといわれる。ビルマを併合した英国が持ち込んだものであった。第二次大戦後、ケシ栽培は戦略的に用いられるようになる。中国本土を追われてビルマ領内に逃げ込んだ国民党の残党は戦費調達を阿片生産でまかない、共産化に対抗する米国もそれを後押ししたと言われる⁽⁴⁾。その後、ローシンハンやクン・サー (中国名・チャン・シフ) など、いわゆる麻薬王の資金源となり⁽⁵⁾、80年代以降は東シャン州国境地帯に陣取ったビルマ共産党の資金源となっていた。89年のビルマ

共産党政治局の崩壊にともない、共産党指揮下の部隊はいわゆるエスニックコミュニティリストとして軍閥化し、これが前述のように90年代に入ってヤンゴン政府と停戦協定を結んで現在に至っている。

停戦の前提は利権の維持であり、新たな利権の獲得である。表面上ケシ栽培は消え去ったが、タイで「ヤーバー」と呼ばれる覚醒剤メタアンフェタミンの主要産地は東シャン州であり、その生産には実効支配勢力が関わっていると言われている。一方、東シャン州特別区は自治権の名の下に、ミャンマー国法を

超える特区としての権益を与えられ、ミャンマー国内では禁止されている賭博を含む享楽的な観光開発が可能である。

モンラーの観光化が進んだ90年代半ばは、開放政策の成功にともなう中国の経済発展が地方にも波及し始めた時期と一致している。所得増加にともない、一般中国人の間にも旅行する余裕が生まれてきた。しかし観光離陸期の常として、観光の様態は洗練されたものではなく、むしろ欲求のリリースという性格が強く、消費性向の高い享楽的観光が主体となしている。モンラーにおける観光開発は、

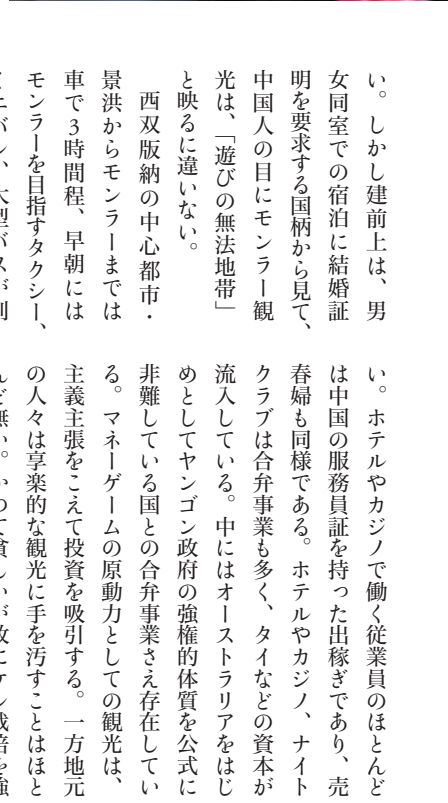
その時点での中国人観光の性格をきわめてうまくとらえた国境観光と結論づけて良からう。経済的には豊かになりながらも、査証取得など海外旅行は一般中国人にとってまだ高嶺の花であろう。しかしモンラーへは身分証明書だけで簡単に越境することが出来、経済的に急速に発展する中国と、世界最貧国の一つであるミャンマーの経済格差から心理的にも優位に立つことが出来る。また国外という気易さから、倫理的な判断もゆるみがちになる。モンラーでは直接接する国境という地の利を活かし、こうした観光需要を効率的に吸収



上・西双版纳の中心都市、景洪からモンラーまでは車で3時間程。途中、勐海近くの路傍で肉ソバの朝食をとる観光客。中・国境のミャンマー側ゲート。下・ヤンゴン政府と反政府勢力の停戦実現を記念する大看板。SPDC (国家平和発展評議会) のキンニン第一書記(その後首相となり失脚)と、東シャン州軍の司令官ウー・サイリン (中国名・リン・ミンヤン)。



上・野外飲食店、夜には売春婦、それを物色する男たちが集まる。下・同じさいご賭博でも、さらに伝統的な形式のもの、さいごには数字ではなく、動物が描かれる。



する装置として、観光が組織化されている。モンラーにおける観光の柱は、ギャンブルとセックスツーリズムである。町中にはカジノが林立し、夜には売春婦が町にあふれる。そのほかにもワニのレスリング、象のサツカー、タイのニューハーフショー、ロシア女性のストリップ、見世物化された少数民族など享樂的なアトラクションがさまざま取り揃えられ、グローバル化したミクロワールドが展開されている。カラオケバーでは風俗的営業が行われ、ホテルは堂々と客室を時間売りしている。中国国内でも売春が存在しないわけではない。

フシヨー、ワニのレスリング、象のサツカーなどのアトラクションを含んで200〜250元(2400〜3000円)ほどである。物価水準からして安価ではないが、極端に高くない。しかしモンラーでの観光は基本的に所得消費型である。ツアー料金には当然、賭博の掛け金、買春は含まれていないし、飲食、酒代も別立てである。これらに費やされる支出はツアー代金、アトラクションへの入場料をはるかに上回る。

実際にモンラーの観光を動かしているのは、タイ・ルーやワなど地域の人たちではない。しかし建前上は、男女同室での宿泊に結婚証明を要求する国柄から見て、中国人の目にモンラー観光は、「遊びの無法地帯」と映るに違いない。

西双版纳の中心都市・景洪からモンラーまでは車で3時間程、早朝にはモンラーを目指すタクシー、ミニバン、大型バスが列をなす。景洪発のモンラー1日観光は、ニューハーフシヨー、ワニのレスリング、象のサツカーなどのアトラクションを含んで200〜250元(2400〜3000円)ほどである。物価水準からして安価ではないが、極端に高くない。しかしモンラーでの観光は基本的に所得消費型である。ツアー料金には当然、賭博の掛け金、買春は含まれていないし、飲食、酒代も別立てである。これらに費やされる支出はツアー代金、アトラクションへの入場料をはるかに上回る。

モンラーの将来

経済的位相差を積極的に利用する国境観光は、急速な経済発展を続ける中国周辺で次々と生まれつつある。モンラーの北方、エスニックチャイニーズであるコーカンが実効支配する。

る東シャン州第一特別区にはラオカイというモンラーと同様の国境の歓楽街が形成されており、ベトナムも中国国境に類似した歓楽街を建設中と言われている。実際、西双版纳の観光は近年低落傾向にある。理由の一つは大埋や麗江など雲南省北部の開発が進展し、その結果として市場を奪われたことであろう。しかしモンラーなど隣接する国境観光の急成長も無視できない要因である。景洪からモンラーへ、毎日膨大な数の観光客が移動している。しかしその途上、かつて隆盛をほこった景真八角亭などの観光スポットを訪れる人はほとんどいない。

投資者、軍閥をはじめ利権を求める地元など、モンラーの観光に関わる全ての人々を非難することは容易い。しかしこうした倫理的な立場からの批判に、どれだけの意味があるのだろうか。モンラーの観光は、国境を挟む経済的位相差を前提とした、典型的な「弱者の戦略」であり、産業的基盤にも資本の蓄積にも恵まれない人々が採りうる必然的な選択である。成立過程の不透明さ、成立した観光の享樂的性格にもかかわらず、それ自体が非難されるべきものでは無かろう。

る。しかもその観光は、法的規制の影響を受けやすく、社会意識変化の影響を直接受ける享樂的性格が強いものである。また享樂的観光は、それ自体で完結する傾向が強く、他の観光形態への発展性に欠けている。モンラーの観光は、外的環境の影響を受けやすい、脆弱な基盤の上に成立したといつてよかろう。今後周辺の国境地域で享樂的観光地間の競争は激化していくことになる。また中国人のレジャー意識が徐々に変化し、それに呼応して大都市周辺部では大規模テーマパーク開発も進んでいる。モンラーにとって現在の繁栄が一時の夢として消え去る可能性は決して小さくない。



上・モンラーを2kmも離れれば、のんびりした農村風景 下・東シャン州には山の中とは思えぬ豪華な意匠で埋め尽くされた寺院がある。阿片の経済力がこうした寺院を成立させてきた

注
1) Lintner, Bertil, *Burma in Revolt: Opium and Insurgency since 1948*, Boulder, Westview, 1994
2) Finney, Ben R. and Karen Ann Watson eds., *A New Kind of Sugar: Tourism in the Pacific*, Honolulu, East-West Center, 1975
3) Renard, Ronald D., *Opium Reduction in Thailand 1970-2000: A Thirty-year Journey*, Chiang Mai, Silkworm, 2001
4) McCoy, Alfred W., *The Politics of Heroin in Southeast Asia*, New York, Harper & Row, 1972 (堀たお子訳『ヘロイン：東南アジアの麻薬政治学』サイマル出版会)
5) Lintner, Bertil, *Land of Jade: A Journey from India through Northern Burma to China*, Bangkok, White Lotus, 1990

国境観光による自国通貨の流出、西双版纳観光の低落に中国側も手をこまねいていたわけではない。西双版纳傣族自治州旅游局での聞き取りによれば、モンラーでの身分証明書による越境者の宿泊禁止など、様々な対策がとられてきた。しかしモンラーの国境観光を締め上げれば、ゲートウェイとしての景洪の宿泊需要に壊滅的な打撃を与えてしまう。西双版纳観光はきわめて難しい局面に立たされている。

さてひるがえって、モンラーの観光について考えてみよう。倫理的な立場から観光客、

培であることを否定するものではない。モンラーは経済の根幹をすべて観光に依存してい

新宿区 神楽坂の 観光調査

立教大学観光学部 稲垣・杜ゼミナール



撮影／稲垣徳文

『交流文化』では毎号、様々なフィールドでの学生の活動を紹介する。

今号では第1回目として、東京・神楽坂地区で2004年夏に実施したフィールドワークを報告する。

「粋なイメージ」と路地の風情

新宿区神楽坂の観光調査は、立教大学と新宿区との間で結ばれた協力協定の一環として実施された。協力協定は新宿区の商業振興、観光行政などに対する立教大学の学問サイドからの協力と、それに付随して生じる教育機会の利用を主な柱としている。

今回のフィールドワークの目的は、観光にともなう神楽坂の空間構造の変遷、来街者の

意識および移動パターンを明らかにすることであった。

神楽坂はかつて東京を代表する花街であり、花柳界と地元商店街が一体となった街区を形成してきた。花柳界は衰退傾向にあるものの、「粋なイメージ」と結果として残された路地の風情が人を呼び、飲食店などの新規開業もあって、新しい界限型観光地として変貌し、地域的にも拡大しつつある。

来街者への聞き取り調査実施

調査は観光学部の稲垣研究室と杜研究室が担当。総計30名以上の学生が参加し、空間構造の変化を知るために、地区内の営業施設、住戸を悉皆訪問して聞き取り調査を行った。

また来街者への聞き取り、来街者の移動パターンを追跡調査することで意識と行動とを明らかにしようと試みている。

これまでの調査を通じて、神楽坂という地域に対する地元住民の認識と来街者の認識との間には、かなりの落差があることが明らかになった。また来街者は神楽坂への来訪目的を「街歩き」といった感覚でとらえており、行政の考える観光という枠組みとはかなりの隔たりがあるということもわかってきた。地域イメージは、地域住民の認識だけで形成されるのではなく、地元住民と来街者の相互作用を通じた交渉過程でつくられていくものであり、今後はその相互作用の実態を明らかにする調査を行うことが課題である。



調査の概要

調査日 2004年7月30日(金)、31日(土)
調査内容 土地利用調査、来街者アンケート、来街者行動追跡調査
調査者 立教大学観光学部 稲垣・杜ゼミナール

参加学生の声

中島暁子(観光学部観光学科4年)

私が担当した調査項目は土地利用、建物各階の利用形態であり、地番に従って個々に割り振られた担当街区をくまなく調べることとなった。調査期間中は酷暑で、坂の上り下りも多く体力的には大変だった。しかし一歩路地を入れれば、銭湯など昔ながらの町並みが残っており、新宿、都心といったイメージをいい意味でくづがえす、何か懐かしさを感じさせる自分も住んでみたい街だと感じた。

吉川裕子(観光学部観光学科3年)

主として観光客の追跡調査とアンケートによる来街者の意識調査を担当した。意識調査では泊まりがけで東京に遊びに来ていながら、自分自身を観光客とは考えていない来街者が多く見られ、行政側のとらえ方と来街者の意識との間には大きな落差が見受けられた。これは予想外の結果であった。かつて花街として栄えた神楽坂を、集客力の高い商業地域として発展させるためには、行政側の視点だけでなく、変化する来街者の意識にあわせた対応が是非とも必要と感じた。



8



2

1



3



11

10



9



12



7



4



5



6

① 調査のスタート地点は善国寺(毘沙門天)から。神楽坂まちづくりの会の水野正雄氏の案内で、地区内の歴史的な寺社や特徴的な坂、趣のある横丁などを歩く。

② 花街だった神楽坂には料亭が残っている。料亭『千月』のご主人ににぎわいを見せていた当時の話、最近の料亭事情などをうかがう。

③ 芸妓組合で芸者さんの踊りの稽古を見学する。

④ ⑤ 神楽坂を代表する芸者、夏菜姐さんに話を聞く。

⑥ ⑦ 著名な作家や脚本家たちが原稿書きのために宿泊したため「ホン書き旅館」と呼ばれる『和可菜』の女将、和田敏子さんに野坂昭如や山田洋次らの滞在当時の話をうかがう。

⑧ ⑨ 神楽小路、みちくさ横丁、芸者新路、かくれんぼ横丁など、神楽坂には花街ゆかりの路地の名がいくつも見られる。

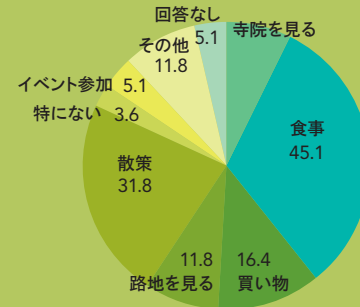
⑩ ⑪ 茶器やお椀、盆、花台などの漆器が並ぶ山下漆器店とそのご主人。

*アンケートの概要
 調査日 2004年8月～11月
 調査内容 住民、事業所、来街者へのアンケート
 調査数 住民(145名)、事業所(49名)、来街者(195名)

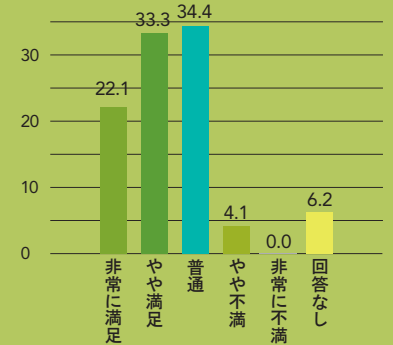
アンケートの結果 (一部)

神楽坂来街者の来街目的、 観光資源認識などを中心に

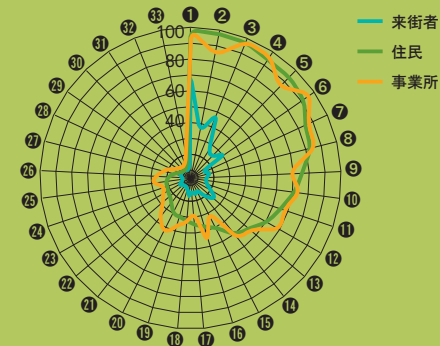
神楽坂来街者の来街目的



神楽坂来街者の満足度



神楽坂住民・事業所・来街者の認識度分布



注：①普国寺(毘沙門天) ②赤城神社(赤城元町)
 ③神楽坂まつり ④本多横丁 ⑤筑土八幡神社 ⑥軽子坂
 ⑦若宮神社 ⑧宮城道雄記念館 ⑨芸者新道
 ⑩袖摺坂 ⑪仲通り ⑫光照寺(袋町15) ⑬かくれんぼ横丁
 ⑭地藏坂 ⑮ゆれい坂 ⑯瓢箪坂 ⑰相生坂
 ⑱夏目漱石誕生の地(喜久井町) ⑲左内坂 ⑳竜門寺
 ㉑尾崎紅葉旧宅跡 ㉒多間院(弁天町) ㉓夏目漱石終焉の地(早稲田南町)
 ㉔新坂 ㉕長源寺 ㉖法正寺
 ㉗宗参寺(弁天町) ㉘兵庫横丁 ㉙御殿坂 ㉚浄輪寺(弁天町)
 ㉛歌坂 ㉜誓閑寺(喜久井町) ㉝来迎寺(喜久井町)

これらのアンケート結果からは、来街者の神楽坂に対する満足度は決して低くはないものの、地元住民と来街者の地域に対する認識には大きな隔たりが存在していることが明らかである。来街者は、神楽坂を散歩や食事といったきわめて日常的なレジャー目的のために訪れる場所として認識しており、たとえ宿泊をとまう旅行の一部として訪れる場合でも、自らを観光客とは認識してはいない。

立教の観光教育

「リアリティある教育」の柱——フィールドワーク

国内はもとより、シリコンバレーからブータンまで

立教大学観光学部は「リアリティある教育」を標榜している。この大きな柱がフィールドワークである。

第2～4学年に配置されている演習、学生が自らテーマを作って講義を組み立てる自由研究を中心に、観光学部では様々なフィールドワークが行われている。

実行されているフィールドワークは、伝統的な地域研究の枠組みによる観光地域調査から、農村観光における農業体験、エコツーリズムの自然体験、起業の現場まで多様である。フィールドも国内はもとより、シリコンバレー(カリフォルニア)からブータンまで世界各地に広がっている。

様々な現場体験が学生の当面の満足感につながることは事実である。しかし観光

学部「リアリティある教育」はこれらだけを指しているのではない。むしろ現場体験が多くの場合、予想を裏切ることが重要である。観念的に考えていた論理と現実とのギャップから生まれる疑問、これをもとにした問題意識の形成こそが、観光学部における教育の源泉となる。フィールドワークを指導する教員の役割は、現場での指導、事後的な指導を通じて、学生の素朴な疑問を問題意識にまで転化させることである。

大学教育の目的は、4年間の学習によって社会人としての知的な素養を身につけることであり、それを通じて職業人として必要な実際の知識や、大学院で要求される分析手法の基礎を身につけることも要請され

る。しかしこれら一連の教育を背後から支えるのは、学生自身の問題意識に他ならない。学問ことに社会科学は日常生活に基盤をおくものでありながら、文献を渉猟し抽象的なレベルで問題意識を構成していくことも不可能ではない。

しかしフィールドなど現場体験から生まれる問題意識は観念的なそれに比べ、いかに素朴なものであったとしても、きわめて強靱であり研究・学習を進めていく上できわめて大きな力になる。観光学部が推進してきた「リアリティある教育」とは、この現場で生まれる強靱な問題意識に支えられた教育を指している。



クルーズ船「メラネシアン・ディスカバリー」



クルーズの参加者たち(中央は案内人)



水上部落でのカヌーライド



観光客に民芸品を並べる村の人々

私のカンニバル・ツアーズ

豊田由貴夫 (文学部)

「人食い」が行われていたとされる未開の地を訪ねる
パプアニューギニア豪華遊覧船の旅。



『カンニバル・ツアーズ』という映画がある。「人食い旅行」という意味になるこの映画は、オーストラリアの映像作家デニス・オルークの1987年の作品であり、パプアニューギニアのセビック川流域で行われるクルーズ観光の様子を描いたものである。このクルーズ観光は、現在「エスニック・ツーリズム」と呼ばれるものの典型的な例とされており、この映画は観光という現象の持っている様々な問題を、極端な形で描き出しているので有名である。

首狩りが行われていた地

この映画の舞台であるパプアニューギニアのセビック地域は、電気も水道もない、近代化の影響から取り残されたような地域である。ヨーロッパ人と接触する前は、部族間戦争が行われ、首狩りが行われていたと言われている。そこに観光客としてやってくる人たちは既に世界中を回り、ありきたりの観光では物足りなくなつた人たちであり、昔、「人食い」が行われていたとされる、典型的な「未開の地」であるこの地域を訪れるのである。

観光客はエアコンのきいたクルーズ船に乗り、船内で豪華な三食をとりながら、川沿いの村を訪ねる。村で現地の伝統的な踊りを見たり、伝統的な彫刻作品を土産物として買ったたりして楽しむのである。

彼らはまだあまり観光客がやってきていないとされる「未開の地」を求めてこの地を訪れるのだが、映画では観光客がその地を「商業化」し、「観光化」していく様子が描かれる。例えば、この地域の多くの村には「精霊の家」と呼ばれる建物があり、儀礼の

中心の場となっている。そのため、その中にはイニシエーションを終えた男性しか入れず、女性や子供は入ってはいけないことになっている。しかし映画の中では、旅行者から現金をとつてこの精霊の家に客を案内する場面が出てくる。「なぜ旅行者を精霊の家に入れるのか」という質問にたいして、村人は悪びれずに「金のためだ」と答える。現金を獲得するための手段として、秘密とされる場所も観光客に公開してしまうのである。

値切りの交渉を楽しむ裕福な人びと

また、このカンニバル・ツアーズでは、観光客が土産物を買うシーンが何度か出てくる。パプアニューギニアは造形芸術で有名な地域であり、仮面や彫像など、地域によって様々なデザインのものが見られる。そしてこれらの仮面や彫像は、本来は儀礼用のものであったのだが、現在ではほとんどが観光客へ売るためのものとして制作されている。そして観光客はこのような仮面や彫像を土産物として買うのだが、彼らはそこで値切りの交渉を楽しむツアーに参加する人々は裕福なヨーロッパ人であり、その人たちにとつて、現地で売られている土産物の価格はたいした金額ではない。しかし、彼らはそれでも値切りの交渉をして、多少安く買ったと喜ぶのである。映画の中では、土産物を値切る観光客を見て村の老人がつぶやく。「我々が店で物を買う時、値切ることはしない。言われた値段で買うだけだ。それなのに、なぜ観光客は土産物を買う時、値切るのだろうか。金をたくさん持っているのに。」ここでは、観光客とそれを迎える現地住民との圧倒的な立場の違

いが示される。

実はこの映画に出てくるクルーズ観光は、今でも「セピック・クルーズ」として行われており、私はセピック川流域をずっと調査してきたので、村からこのクルーズ船を時々見ることがあった。そして「エスニック・ツーリズム」や「文化の商品化」、「伝統の創造」などという、文化人類学で話題になる概念を教えるために、この映画を時々授業で使ってきた。

私は映画のことを知っていたこともあり、前々からこのクルーズには興味を持っていたのだが、最近どうもオーナーが船を手放したがっているらしいとか、そろそろクルーズ自体がなくなりそうだという噂を聞いて（しかしその噂はどうやら事実ではないことが後でわかったのだが）、いつもは村からクルーズ船を見ているのだが、今度は逆の立場から村を見てみようと思い、思い切って分不相応な大金をはたいてこのクルーズ観光に参加してみたのだった。

クルーズに参加しての第一印象は、予想通り、ここでは現地住民の生活とはかけ離れた、レジャーとしての観光が体験できる、ということであった。

クルーズ船の部屋はすべてエアコンの施設があり、各部屋には洗面所とシャワー、トイレが設置されている。船の中には操縦室を除いては自由に行き来ができ、自分の部屋以外に船のデッキや船内の談話室で過ごすことができる。デッキには椅子が設置されており、コーヒー・紅茶が自由に飲める設備がある。また夕方には談話室にバーが開き、アルコール類の飲み物も飲めるようになる。食事は船内のレストランでとるのだが、ここではテーブルをとるにもした他の客との会話を楽しむことが期待される。観光客は既

る時、それは必ずしも容易に体験できるわけではない。交通網が未整備であることから、伝統文化を保持しているような場所まで移動するのは時間やコストがかかる。また宿泊施設が十分あるわけではないので、国際的な水準を保つ宿泊施設から伝統的な村落への移動は、かなりの制約がある。そのような状況を考えて、このセピック・クルーズは、伝統文化を楽しむという意味では、それにとりまなういくつかの問題点を解決している観光の方法であるといえる。すなわち、快適な宿泊施設を確保しながら、水上という交通手段を介して、伝統文化を保持している場所まで直接移動する、という方法になっているのである。

このような観光に対しては、それが圧倒的な力関係の不均衡の上に成立しているという批判もあり、事実、カンニバル・ツアーズの映画ではそれが示されているといつてよい。そしてこのように「未開」な「変化していない」伝統文化を売り物にするのは、



©Camerawork Pty Ltd

『CANNIBAL TOURS』

パプアニューギニアのセピック川流域は、現在でも電気も水道設備もない、近代化の影響から取り残されたような地域。そこでは豪華な遊覧船によるクルーズ観光が行われている。観光客たちは、既に世界中を回り、ありきたりの観光では物足りなくなった人たちが、昔、「人食い」が行われていたとされる、典型的な「未開の地」であるこの地域を訪れる。エアコンのきいた遊覧船に乗り、船内で三食をとり、船が川沿いの村に着くたび、そこを訪ねる。村で現地の伝統的な踊りを見たり、村人と一緒に記念撮影をし、伝統的な彫刻作品を土産物として買ったのを楽しむ。本作品はそのような観光客と村人との接触の様子を描いたドキュメンタリーフィルム。オーストラリアの映像作家デニス・オルークの1987年の作品。

船内のバーと談話室



「セピック・クルーズ」スケジュール案内

- 1日目
19:30 マダン (Madang) を出港
この日のディナーが歓迎パーティーのような性格を持つ。外洋を航海して、セピック川を河口から入る。
- 2日目
午前: スピードボートで、セピック川河口近くのコバル村を訪問。
午後: ムリツクレイク (海岸近くにある淡水湖) のメンドム村を訪問。
- 3日目
午前: カンバランバの水上部落を訪問。
午後: モイム村とモイム小学校を訪問。
- 4日目
午前: アンゴラム村を訪問 村内のマーケットを見る。
午後: 反対側のアンゴラム・セトルメント(分村)を訪問。さらにピン川(セピック川支流)に入り、パンキン村とピン村へ。
- 5日目
8:00 マダン着

に世界中を回ってきた客ばかりなので、様々な観光地の話題が飛び交うことになる。

クルーズ船から村を訪ねる際にはモーターボートに乗り換えて移動する。村で伝統的な踊りや民芸品の展示、カヌーライドなどを楽しむのだが、それはほんの一時の経験であり、2、3時間ほど村で過ごした後はまたクルーズ船に戻り、シャワーを浴びて(村での滞在による「汚れ」を取り去り)、船内の快適な生活に戻るようになっていく。

このように、このクルーズ旅行は高級なレジャーを楽しむという性格もあるのだが、意外だったのは、同時にこのクルーズが現地の文化を勉強するという性格を持っているという点である。それはカンニバル・ツアーズの映画で批判されたことを克服しようとしているとも考えられる。

例えば、毎日夕食前にはレクチャーがあり、現地の文化に関する説明が行われる。さらに夕食の後にはパプアニューギニアの文化に関するドキュメンタリー・フィルムが上映される。このレクチャーとドキュメンタリー・フィルムによって、観光客は現地の文化の表面的な理解だけでなく、その意味や背景についても知ることが意図されているようだ。

クルーズ観光が持つ合理性

そして伝統文化を体験しようとする観光としてこのクルーズ観光を考えてみると、そこにはこの観光形態の持つ合理性が見えてくる。観光としてパプアニューギニアで伝統文化を楽しむとす

世界の中央に対して周縁性を強調することになり、周縁部が持っている中央依存の性格をますます強めることになる、という批判もある。しかし、あくまでも伝統文化を魅力として観光を行うということを前提にした場合(それはパプアニューギニアの観光の場合かなり重要な位置を占めるのだが)、このセピック・クルーズのような観光は、様々な問題点を持つ他の旅行方法と比べるならば、この地域の観光としてはかなり有効な方法になっているのがわかる。つまり、このような観光方法は、交通網や宿泊施設が十分に確保されていない地域では、快適な宿泊施設を確保しながら直接的に伝統文化を味わえる方法になっているのである。

私は観光の持っている様々な問題点を自ら観察しようと思つてこのクルーズ観光に参加したのだった。しかしクルーズ船で5日間を過ごした後は、そこに見られる多くの工夫に感心し、総じて「満足」してしまつて帰ってきたのだった。

読書案内

Book Review

特集テーマに関係のある書籍の紹介。今号は、地理学者と写真家による中国雲南省との魅力的で幸せな出会いの記録。

「秘境・雲南」の変化を知る貴重な資料

本書は一九八六、八八年の二回にわたり吉野正敏を団長に実施された中国・雲南省における地理学術調査の記録である。学術調査記録といっても、学問的報告書と言うよりも、学問的成果を易しく解説する啓蒙書であり、さらには雲南を旅した研究者の旅行記、紀行であると言つてよい。学問的な「フィールド行」といえど、もつとも基層的な部

分においては、観光と大きく変わるわけではない。両者に共通するのは「他者への興味」「旅における発見への期待」であろう。とはいえず学問領域によって、

フィールドにおける研究者と観光者という二面性をどのように処理していくかは大きく異なっている。社会学ではツーリスティックな観察者自身を表に出すことはきわめて少ない。「ツーリスティックな自分」は消し去られ、客観的な視点のみが仮想されていく。社会学がツーリスティックな観察者を想定するのは

雲南フィールドノート

吉野正敏 著
古今書院 2427円＋税



内観的な方法によって観光の構造を明らかにしようと言う特殊な研究のみである。この点、地理学は非常に

このおほかさかさが、本書をきわめて魅力的なものにしている。人文地理、気象、土壌など様々な専門家が、「秘境・雲南」での発見や驚きを語り、インフォーマントとの人間的な交流について

査許可取得上の行き違い、交通機関の遅延や運休、現地サポート体勢の不備、小さな文化摩擦など、調査を実行する上での苦労も語られている。

しかしこれらの苦勞を含めて、フィールドに出た研究者がそれを楽しんでいることは明らかであり、フィールドの楽しみは十分に読者に伝わってくる。また普通なら研究の背後に隠されてしまふ個人的な感情や感動を表に出すことで、個人レベルの興味が研究に結実するプロセスを追体験することが可能であり、初学者にとつて学ぶべき点は多い。

本書のもとになった研究は主として西双版纳を対象にしている。調査隊は省都・昆明から西双版纳の中心都市・景洪まで、一旦飛行機で思茅に飛び、ジープに揺られて五時間かけて到着している。現在なら直行便で四〇分程の飛行である。

わずか十数年の間に西双版纳は大きく変化した。この変化を知る上でも、本書は貴重な資料と言えよう。

雲南の豚と人々

伊藤真理 著
JTB 1500円＋税



写真家による雲南通いは「自分探し」の記録

日本人はルートツ探しが好きだとよく言われる。具体的には日本人の始祖、あるいは「日本的」といわれる文化の根元を他地域にもとめ、日本人と他者を結びつけようという傾向である。そのもつとも知られた一例が中尾

佐助による照葉樹林文化論である。

中尾はプータンから本州に至る照葉樹林帯に文化的連続性を認め、文化伝播、人の移動を構想する。しかしほとんどの場合、いかにまじめな意図で出発したものであつても、ルートツ探しにおいて語られるのは研究者の直感であり、文化の表層部分における類似性ではない。実証的事実が提示されることはなく、読者は時としてとんでもない妄説につき合うはめに陥る。

雲南は照葉樹林帯に位置するところから、このロマンに満ちたルートツ探しの中で主役の一つを演じてきた。本書は広く見れば、このルートツ探しの系譜に位置づけられる。しかし本書は他の

ルートツ探しに見られる、ある種の仰々しさ、重苦しさとは無縁である。それは本書が日本人という集団のルートツ探しではなく、著者自身による個別的なルートツ探しの記録であり、著者自身さえはつきりとはそれを意識していないことを背景としている。著者はアメリカで生まれ、一二年間過ごした後に帰国したが、いわゆる帰国子女である。しかし母国であるはずの日本は著者をかならずも暖かく迎えず、いじめの対象となつた。一方で著者自身もイメージしてきた日本と、その現実の姿の落差にとまどいを覚える。その結果が、帰国後十数年を経て写真家としての雲南行きであつた。著者は「雲南には子供の頃、思い描いていたアジアの原風景」があるという。

しかし雲南に同化し、自らのアジア人としてのアイデンティティを雲南に見いだしたかと言えば、決してそうではない。むしろ雲南を他者として醒めた目で見る、雲南との出会いを通じて自らのアメリカ体験を相対化していったところで著者のアイデンティティは確立されたのではないだろうか。一〇年間に三〇数回の雲南行きを繰り返した著者にしては、雲南への語り口はクールである。そこにはひとつに文化に耽溺した者のもつ偏執狂的迫力はない。しかし一方で、その持つ胡散臭さとも無縁である。

本書は雲南という他者を通じての「自分さがし」の記録として、また交流の記録として意味あるものといえよう。著者の雲南との出会いが幸せなものであつたことは、主役である豚をはじめとする動物たち、子供に投げかける視線からもうかがえる。見ている幸せな気分になることの出来る写真集として一読をお薦めする。

「観光学」はどのように発達してきたのか

2004年度第4回の「観光学部アカデミックアドバイザー公開講演会」では、『観光教育の現代的課題』と題し、ラトロブ大学 (La Trobe University) 観光ホスピタリティ・スクール (School of Tourism and Hospitality) 教授のピーター・マーフィー博士にご講演いただいた。

「観光教育の現代的課題」
ピーター・マーフィー博士
2004年7月16日
武蔵野新座キャンパス
3号館N313教室

マーフィー教授は現在所属される観光ホスピタリティ・スクールの創設者兼責任者であるだけでなく、この分野を代表する世界的に著名な研究者・教育者である。

今回の講演では、「観光学」という学問分野が西欧において歴史的にどのように発達してきたのか、そしてマーフィー教授ご自身はどのように観光学と関わってこられたのか、そして今後の観光学の展望といったテーマについてお話いただいた。

英国 ロンドン大学 (London School of Economics) で経済学を学ばれたマーフィー教授は、米国オハイオ州立大学大学院で地理学の修士号、さらに消費行動論で博士号を取

得され、カナダのプリティッシュ・コロンビア州ヴィクトリアで大学教員および研究者としての生活をスタートさせた。1970年代のヴィクトリアでは、地元経済の新たな柱として「観光」が注目を集め始める一方、その体系的理解や具体的発展計画の作成に関しては専門家不在の状況であった。そのなかにあつてマーフィー教授は、ヴィクトリアを中心とした観光産業の育成のために協力を求められることになる。いわば社会の側からの要請によつて、観光学の分野に足を踏み入れることになったのである。そしてその後の教授の研究の足跡は、まさに観光学そのものの発展と軌を一にすることになった。

観光をデザインすること

マーフィー教授は説明する。たとえばスーパーマーケットについて考えてみると、そこには数多くの商品が並べられ、顧客は商品が並ぶ通路を進むことになる。ではそこでの商品はどのような意図を持って配置されているのであろうか。顧客はすでに心に決めていた夕食の食材を買いに来たのかもしれない。そうであるならば、顧客が必要な食材を最短距離で買い揃えられるように、それぞれの商品を配列するかもしれない。しかし実際のスーパーマーケットの商品配列はそのようにはなっていない。その配置は顧客を最短距離で



移動させるのではなく、むしろ通路をいわば徘徊するように設計される。いろいろな売場を見てまわるうちに、夕食のアイデアを膨らませ、あるいは購入予定でなかったものも手に取らせるように工夫され、配置されているのである。

観光をデザインすることは、これと同じなのだ。教授は主張する。旅行者が期待するものを提供する、ということが観光産業に求められるすべてなのでは決してない。旅行者に何かを観たい、体験したい、あるいは購入したいという気持ちを抱かせる、その仕組みを

考えることが観光をデザインすることにはほかならないのだ。

マーフィー教授はさらに説明する。観光という現象の醍醐味であり難しさは、そこに多くの利害関係者 (ステイクホルダー) が存在することである。ある観光地のケースで考えてみると、その観光地を訪れる旅行者が存在し、その旅行者を受け入れるホテルその他の観光産業が存在する。

しかし観光地にもその地元住民の生活があり、そうした住民は、全員が必ずしも観光に携わっているわけではない。そこには地元的生活があり、文化が存在することになる。交通機関をはじめとする生活インフラは、旅行者にとって必要であるとともに、地元住民の生活にとっても重要である。あるいはそこで営まれる現地の生活、およびその文化こそが、多くの旅行者を惹きつける原因になっているかもしれない。

「社会コミュニティ・アプローチ」

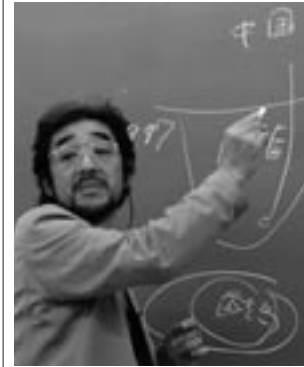
観光地が観光地として成立するためには、こうした立場の異なる利害関係者のあいだに一定の均衡状態が維持されていなければならぬ。これこそマーフィー教授が「社会コミュ

2004年度 観光学部公開講演会

開催日	講演者	演題	対象	
4.15	ウォルター・ジェームソン氏	ハワイ大学観光産業学部学部長	21世紀の観光学	観光学部生
5.10	アンリ・マーニュ氏	ヴァテル高等ホテル 観光学院国際交流部長	フランスにおける観光教育	観光学部生
5.27	リチャード・パトラー氏	英国サリー大学スクール・オブ・マネジメント教授	Sustainable Tourism, does it exist?	観光学部生
6.21	シドニー・チェン氏	香港中文大学 人類学系準教授	観光と食〜グルメの人類学〜	本学学生、本学教職員、一般
6.22 6.23	シドニー・チェン氏	香港中文大学 人類学系準教授	Heritage Tourismの政治学	大学院生
7.16	ピーター・マーフィー氏	ラトロブ大学法経学部 観光ホスピタリティ・スクール 主任教授	観光教育の現代的課題 〜30年の経験を振り返って〜	大学院生、学部生
10.8	ヘルベルト・ツェーマン氏	ウィーン大学 ドイツ学科教授	フランツ・シューベルトと 当時のオーストリア文化	本学学生、本学教職員、一般
10.18	呉 必虎 (Wu,Bihu) 氏	北京大学都市・ 環境科学系教授	中国の観光学研究と教育	本学学生、教職員
10.19	呉 必虎 (Wu,Bihu) 氏	北京大学都市・ 環境科学系教授	観光の空間構造について	本学学生、教職員
10.20	呉 必虎 (Wu,Bihu) 氏	北京大学都市・ 環境科学系教授	中国の観光開発と観光計画	本学学生、本学教職員、一般
10.22	下川裕治氏	旅行作家	なぜアジアを旅し、 何を書こうとしてきたのか	本学学生、本学教職員、一般
10.26	クラウドディオ・ミンカ氏	英国立ニューカッスル大学 教授 (元イタリア国立カフォス カリベネチア大学教授)	地理学と観光研究の関係： イタリアと欧州の事例	観光学部生
10.30	クラウドディオ・ミンカ氏	英国立ニューカッスル大学 教授 (元イタリア国立カフォス カリベネチア大学教授)	都市からの小旅行： イタリア人の小旅行	本学学生、本学教職員、一般
11.13	クラウドディオ・ミンカ氏	英国立ニューカッスル大学 教授 (元イタリア国立カフォス カリベネチア大学教授)	ポストモダン観光地理学の入門	大学院生
11.22	前川健一氏	ライター	戦後アジア旅行者外史	本学学生、本学教職員、一般
12.10	蔵前仁一氏	旅行誌編集長	「旅行人」はこうして生まれた 〜個人旅行者向け旅行誌の 生いたちから現在まで	本学学生、本学教職員、一般

連続公開講演 「アジアの旅を書く」第1回 なぜアジアを旅し、 何を書こうと してきたのか

2004年10月22日
池袋キャンパス8号館 8201教室



第1回講師は「アジアの旅を書く」ということに、常に自覚的に仕事をしてこられた旅行作家の下川裕治氏。旅を通して日本とアジアの関係や時代による変化を見つめる視点を交えアジア旅行の面白さを大いに語っていただいた。以後、2回目が前川健一氏、3回目が蔵前仁一氏。

下川裕治氏

旅行作家。慶応大学経済学部卒業。大学時代から旅を始め、新聞社勤務後、フリーライターとしてアジアを中心に旅を続ける。著書は『新バングラデシュ』『タイ語でタイ化』『アジアの友人』『バンコク下町暮らし』『アジアの弟子』など多数。近著は『週末アジアに行ってきます』『アジア国境紀行』など。新潟大学非常勤講師を勤める。

ニティー・アプローチ」と名づけた研究手法の基本的な考え方である。

観光をビジネスとして考える場合には、そこに通常のビジネスとの大きな違いが存在する。ビジネスの発展には正常な「競争」が欠かせないが、観光の場合には同時に「協調」がきわめて重要、と教授は説明する。

そしてその順番は、「まず第一に、観光地を売り込むことを考えなさい。そして第二があなたのビジネスです。その逆であってはならない」。観光における競争は、協調があつてはじめて成立すると教授は主張する。

立教大学観光学部は、この分野における世界の有数の研究教育機関と国際的なネット

トワークを構築しており、そのネットワークは現在ますます拡大している。今回のマリーフィー教授の講演はそのことを証明する一例であるが、同教授が牽引するオーストラリア・ラトロブ大学との学術交流も今後ますます活性化することが期待されている。

本学部は観光学分野における日本の中心的機関として世界から期待されていると自負するとともに、その期待に応えるため国外の機関とも積極的に協力・連携し、この分野の研究および教育をリードしていくことが与えられた使命だと認識している。

(文責 観光学部助教授 庄司貴行)

ピーター・マーフィー
(Peter E. Murphy, PhD)

ラトロブ大学法律経営学部観光ホスピタリティ学科学科長・教授。英国ロンドン大学より経済学で修士号取得。その後、米国のオハイオ州立大学より地理学の修士号、消費行動論で博士号を取得。観光分野における研究業績でNorth American Roy Wolfe Awardを受賞。世界で75名しか選出されないInternational Academy for the Study of Tourismのメンバーでもある。カナダのプリティッシュ・コロンビア州を中心とした観光行政の中心メンバーとしても長年活躍された後、オーストラリア・ラトロブ大学観光ホスピタリティ学科創設のため同大学に移籍。観光分野で世界的に著名な研究者・教育者のひとり。著書、編著書、論文多数。

Paris

「異文化」は街角にある

大橋健一（観光学部）



都市空間の編成と民族文化の構築との関係を都市観光という切り口から調査研究するため、2003年秋よりパリに滞在し、特に13区シヨワジー地区を主たるフィールドに観察を続けた。

この地区には、1975年以降インドシナ地域からの華人系、ヴェトナム系、カンボジア系、ラオス系移民が多く流入し、約15万人と推計されるバリ首都圏のアジア系人口の約4分の1がこの地区に集中すると言われるほか、「Tang Freres」「Paris Store」というアジア系2大スーパーマーケットチェーンの本拠

地として、フランスはもとより欧州全域のアジア系食料品流通の一大拠点となっており、さらにアジア系レストラン、商店が大規模に集積するパリ市内でも有数の場所となっている。

インドシナ各地の多様な移民が流入

このような環境から同地区は、しばしばパリの「チャイナタウン」とも呼ばれる。だが、実際には上述のようにインドシナ地域各地からの多様な移民によって構成されており、単に「チャイナタウン」と呼ぶには極めて複雑

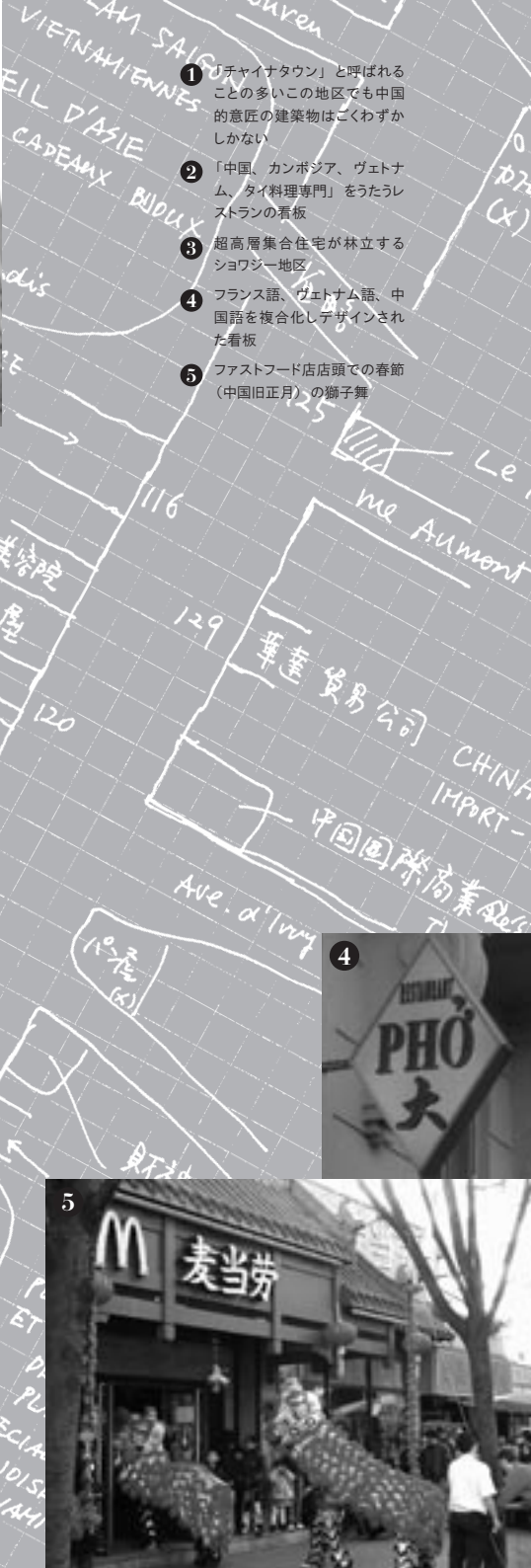
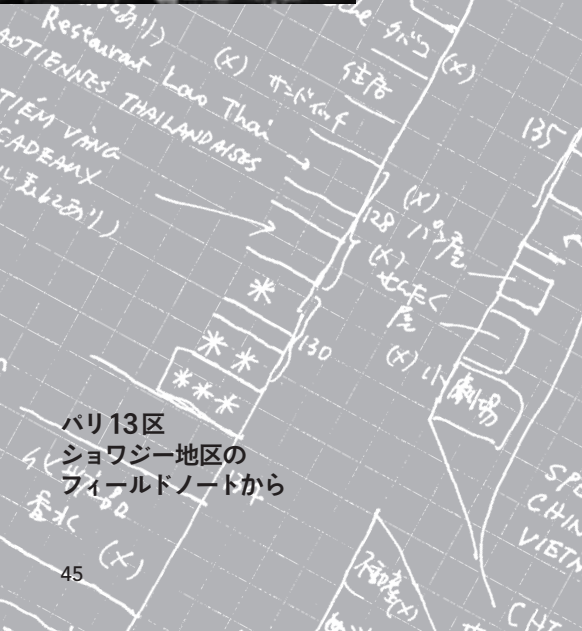


2003年秋から1年間の在外研究でパリに滞在した大橋教授の報告は、アジア系レストランや商店が集積する13区のカルチェから。

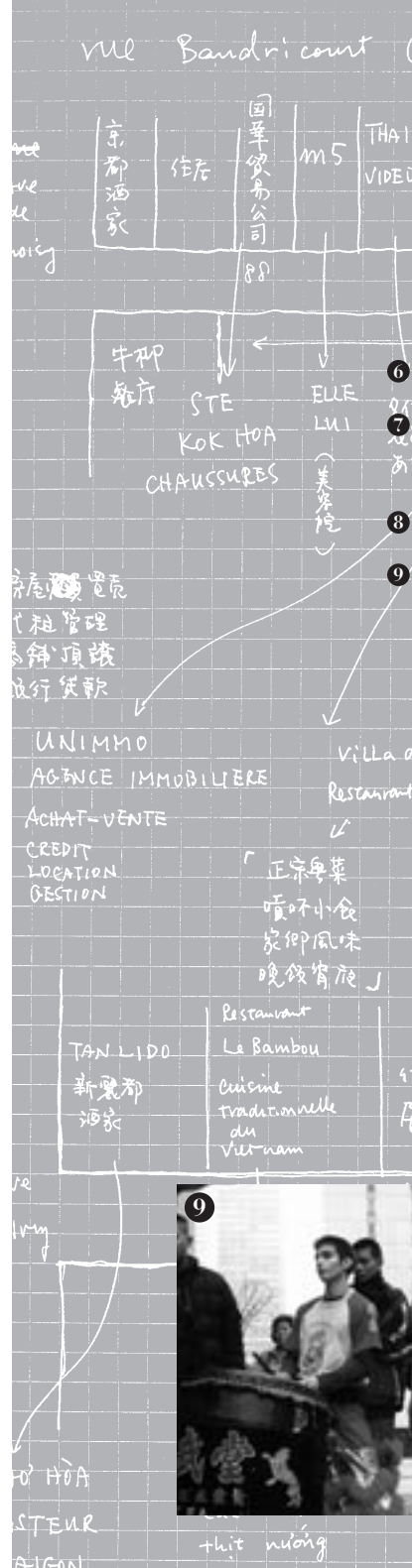
な様相を呈している。地区の複合的な社会構成は、フランス語に加え、中国語、ヴェトナム語、クメール語、ラオス語、タイ語が複数併記された商店の看板や、中国、ヴェトナム、カンボジア、タイ料理が一軒のレストランのメニューに同時に載っていることによっても容易に窺うことができる。

一方で同地区は、60年代からの再開発によって出現したパリ市内では極めて珍しい超高層集合住宅群に75年を画期としてインドシナ系移民が流入したという都市空間構成の上でも興味深い特徴を有している。

- 1 「チャイナタウン」と呼ばれることの多いこの地区でも中国的意匠の建築物はこくわずかしかない
- 2 「中国、カンボジア、ヴェトナム、タイ料理専門」をうたうレストランの看板
- 3 超高層集合住宅が林立するシヨワジー地区
- 4 フランス語、ヴェトナム語、中国語を複合化したデザインされた看板
- 5 ファストフード店頭での春節（中国旧正月）の獅子舞



パリ13区
シヨワジー地区の
フィールドノードから



- 6 春節時にパリ市役所庁舎前に中国風ランタンが飾られた
- 7 2003～04年にかけては「フランスにおける中国文化年」のため、多くの中国関係のイベントが開かれた
- 8 ヴェトナムの新年「テト」を祝うイベントのポスター
- 9 ショワジー地区を拠点に活動する獅子舞グループ



地区の中心は旧貨物駅の再開発によって出現した高層住宅、人工地盤上のショッピングセンター、駐車場、地下物流倉庫からなる複合街区だが、同地区は、このような物理的環境から、そしてまたフランスにおける移民統合政策と関連した公共空間の編成のあり方も手伝って、一般的に想起される「チャイナタウン」とは景観上様相を大きく異にしている。中国風の空間演出が地区一帯でなされ、観光客で賑わう日本や北米のいわゆる「チャイナタウン」を見慣れた者の目には、このような地区を一般的な観光の文脈から理解することには困難を伴うかも知れない。しかしながら、日常生活と観光との境界が溶解しつつある今日、必ずしも「それらしく装う」場所のみが人々の関心を引付けているのではないことに留意すべきである。

同地区のアジア系レストランでの食事や商店での買物は、パリで人々が日常の延長線上にありながらそれを越えたエキゾティックかつオーセンティックな経験を構成している。最近では安価に海外旅行ができるようになってきたため、以前に比べるとパリのエスニック料理店の売り上げは落ち込んでいるとのことだが、それでも人々は日常生活の延長線上でこ

これらの店にしばしば足を運んでいる。むしろ、海外旅行の経験がこれらレストランや商店での消費の質を変えていると言えるかも知れない。

世界都市パリの消費マニュアル

たとえば、調査中、アジア系スーパーマーケットでよりオーセンティックな経験としてアジア料理の食材を求める人々や、元来は移民子弟向けの母国語教室だった中国語やヴェトナム語教室に旅行を契機に通う人々に多く出会った。

このような人々の関心の所在は、相次いで『Le Monde à Paris』(Paragramme)、『Paris exotique』(Hachette)と、パリで文化的多様性を享受するための情報を満載したガイドブックが出版されたことから窺える。これらには、パリ市内のどこへ行けば各国・地域の情報、物産、料理、文化イベント等を享受できるかが詳細に紹介されており、言うなれば世界都市パリの消費マニュアルとなっている。

こうしたガイドブックの存在は、何よりもパリが世界都市として多様な人々の交流の結節であることを物語ると同時に、パリが抱え込むその文化的多様性が、今日のパリという

都市における人々の生活や消費、娯楽、文化活動などのあり方を大きく規定する重要な要素となっていることを示している。

境界の溶解と「観光」の再定義

このような消費や経験は、従来前提とされてきた日常／非日常、自文化／異文化などの固定的な枠組みとその境界を確実に溶解させている。「観光」というテーマに則して言えば、日常から分離されたその対極に「観光」が位置し、そこで「異文化」の経験や消費が展開するという図式では、上述の現象は理解できない。エスニック料理店に行くことは日常生活行為の延長線上にありながら「観光」を構成する経験の一部をもちしている。先に触れたガイドブックのキャッチコピーを借りれば、「異文化」は街角にあるのである。

今後、地球規模での交流がさらに加速化するることによって地球上のそれぞれの場所の社会文化の構成は、さらに複合の様相を帯びることになる。もはや我々は固定的な場所、人々、文化のセットを前提に現代を想定することはできなくなっている。このような状況の下、「観光」概念もまた確実に再定義が迫られていると言えよう。

RIKKYO
UNIVERSITY
PRESS

立教大学出版会

活字の森へ、知の大海へ

源氏物語の性と生誕

王朝文化史論

小嶋菜温子（文学部教授）〔著〕

物語論の現在、平安王朝の社会と文化が産み出した物語の歴史的意義を問う。『源氏物語』の性と生誕を媒介として日本文学史・文化史の把握にとって不可欠な物語論・王朝文化史論に挑戦する意欲的な試み。

A5版／上製 定価7600円＋税
ISBN4-901988-04-2 C3093



発売 有斐閣

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町2-17
Tel.03-3265-6811 Fax.03-3262-8035
<http://www.yuhikaku.co.jp/>

立教大学出版会

〒171-8501 東京都豊島区西池袋3-34-1
Tel.03-3985-2610 Fax.03-3985-0279
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/u-press/>



フランス現代詩の風景 イヴ・ボヌフォワを読む

小倉和子（観光学部教授）〔著〕

現代フランスを代表する詩人、イヴ・ボヌフォワにおける「風景」の詩学。長くボヌフォワに親しんできた著者ならではの透徹した読解。そして詩論、原文と対訳を織り込んで、詩の美しさを読者に届けたい。

四六判／上製 定価2500円＋税
ISBN4-901988-01-8 C1098

次号予告

2005年7月刊行予定

特集

街角の交流文化 ロンドン、ウィーン、 東京、クアラルンプール

交流文化

創刊号01

2005年1月10日発行

発行人 稲垣勉
編集人 大橋健一

デザイン 望月昭秀
印刷 こだま印刷株式会社

問い合わせ先

立教大学観光学部

〒352-8558 埼玉県新座市北野1-2-26
TEL 048-471-7375
<http://www.rikkyo.ne.jp/grp/tourism/>

*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

©2005 Rikkyo University, College of Tourism. Printed in Japan.

執筆者紹介

稲垣勉

（いながき・つとむ） 観光学部長
1973年立教大学社会学部観光学科卒業、1976年同大学院社会学研究科修士課程修了。横浜商科大学助教授を経て1987年より本学勤務。1994～95年ヴァージニア工科大学客員教授、2000～01年ハワイ大学客員教授。主著に『観光産業の知識』、Japanese Tourists（共編）など。

大橋健一

（おおはし・けんいち） 観光学部教授
都市人類学・都市社会学専攻。1984年立教大学社会学部社会学科卒業。同大学院社会学研究科博士課程前期課程修了。香港大学アジア研究センター客員研究員、福島女子短期大学助教授、兵庫教育大学助教授を経て、98年より本学勤務。韓国・延世大学国際研究センター客員研究員、フランス・国立科学研究センター都市人類学研究所客員研究員を歴任。主要著作に『都市エスニシティの社会学』、『香港社会の人類学』、『アジア都市文化の可能性』、『観光のまなざし』の転回』（以上共著）など。

白坂蕃

（しらかさ・しげる） 観光学部教授
1943年中国北京・丰盛胡堂生まれ。1969年東京学芸大学大学院博士課程（地理学）修了。東京学芸大学名誉教授。農村・観光地理学および東南アジア（hill stations）、中国（焼畑）、アルプスやトランシルバニア（羊の移牧）の地域研究を専攻。主著に『スキーと山地集落』（明玄書房）、『熱帯中国—人と自然—』（共著／古今書院）、『海のくらし』（小峰書店）、『山の世界』（共著／岩波書店）など。

杜国慶

（と・こつけい、Du Guoqing） 観光学部助教授
中国雲南省出身。南京大学地理系、同大学大学院を経て、1994年に国費留学生として来日。1997年4月に筑波大学大学院博士課程地理学専攻入学、「中国の都市システムの変化と要因」と題する論文により、2000年3月博士号を取得。2000～02年日本学術振興会特別研究員。2002年4月より本学観光学部に勤務。主な研究分野は都市地理、都市観光、地理情報システム（GIS）。

豊田由貴夫

（とよだ・ゆきお） 文学部教授
1955年生まれ。東京大学大学院社会学研究科修了後、亜細亜大学国際関係学部助教授を経て、現職。専攻は文化人類学。パプアニューギニアを中心とする太平洋地域でフィールドワークに従事。共編著にFringe Area of Highlands in Papua New Guinea、New Frontiers of Sago Palm Studies、論文に「メラネシア・ビジンと植民地主義」など。翻訳に『オセアニア神話』（青土社）。